

2014年度 大阪大学言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会
(大阪大学言語文化学会第45回大会)

2014年6月26日 於大阪大学箕面キャンパス

発表要旨 (言語文化学会会員分)

第1会場 (E101教室)

ミハイル・チェーホフ ―演劇に救われた人生―

西田 容子 (言語文化専攻博士後期課程)

本発表では、ミハイル・チェーホフという20世紀前半のロシア演劇を代表する俳優に焦点をあて、彼の人生が演劇によっていかに救われたかということについて論証する。チェーホフは、俳優、演出家、教育者として多大な成功をおさめたが、その一方で幼少期から複雑な運命を背負い、鬱やアルコール依存症に苦しんでいた。これまでの研究は、チェーホフがいかに役を演じたかという分析や、教育者として作り上げた演技メソッドの内容の解説を試みるものが多く、人物としてのチェーホフ研究は端緒についたばかりという感が否めない。

本発表では、チェーホフの人生そのものに着目し、彼が演劇という芸術を自身の人生の中でどのように捉えていたかということについて考察する。演劇の捉え方は様々であり、昨今ではドラマセラピーやサイコドラマのように医療現場での心理療法として捉えられることも少なくない。チェーホフの時代にはドラマセラピーのような概念は存在していなかったが、概念こそ確立されていなかったものの、チェーホフに起きたことはドラマセラピーと同様のことであったと考えられる。チェーホフは、“他人の人生を自分のもののように生きる”という演劇の特質を利用し、人生を迫体験し、自身が抱える問題を解決したとよい。その過程において、彼は“他者を自分の中に引き込む方法”や“多角的にものを見る方法”を習得した。チェーホフが、自身の問題解決の糸口となったこれらの方法をいかに学んだのかということ、チェーホフ自身および同僚の演劇人の回想録、現代の演劇論、医療現場での演劇活用の現状をふまえながら考察する。

一方ならぬ努力を強いられたチェーホフの人生において、演劇とは一種のセラピー的なものであり、困難を克服するための救いとなったという仮説を論証することが、本発表の研究目的である。

日本漢文小説における転生復讐譚の展開とその系譜―『夜窓鬼談』の「鬼児」を中心に―

聶 晶 (言語文化専攻博士後期課程)

飛鳥時代から仏教の伝来にしたがい、因果応報や転生などの思想が日本に入ってきた。これは筆耕文学と舌耕文芸にも深い影響を与えた。しかし、創作の手法と表現の技巧が異なるため、同様のモチーフの作品には、ジャンルを超えて共通するものと、それぞれに独自の特徴がある。

転生とは、死後に別の存在として生まれ変わるということを指す。これは、インドとギリシア古代の宗教思想の一つであるが、仏教の輪回思想に含まれて広く伝播されている。これについての物語は古今日本の文学と文芸作品に多く記載されている。

日本の江戸・明治時代の漢文小説の中にも、一編の転生譚がある。それは、『夜窓鬼談』上巻にある「鬼児」という作品であり、金が盗まれた者が自殺した後、金を盗んだ人の子供として転生して復讐したという勧善懲悪の物語が描かれている。しかし、この話は、作者のオリジナ

ルのものではなく、落語と民話からの改作である。その原典は三遊亭円朝の「もう半分」という作品である。

それでは、漢文小説としての「鬼児」と落語の「もう半分」の間には似たような共通点があるのか、また相違があるのか。更にこの一類の物語には、どのような発生背景があるのか。これらの疑問を解明するために、本発表は、漢文小説の「鬼児」という転生復讐譚を中心として、作品の創作特徴、題材の伝承、及び文学・文芸類話の異同などの方面から比較・分析することを行い、その系譜と発生背景を解明しようとする。

第2会場 (E102教室)

オーストラリアにおける日系コミュニティの母語維持・継承に関する意識

武井紀子 (言語文化専攻博士後期課程)

移民社会における言語の問題に目を向けるとき、民族言語の維持・継承は当該民族の存続または、アイデンティティに関わる重要な問題である。海外に居住する邦人数は近年、女性の数が男性の数を上回り、女性が増加傾向であることが言われている。この現象は、日本人女性の国際結婚の増加に付随しているものと思われる。邦人数の多いオーストラリアでは、日系コミュニティの言語シフトが速いスピードで進んでいるとの指摘があり、その要因は「族外婚」(exogamy)であると指摘されている(Clyne 2003)。オーストラリアにおける日本人の移住は1980年代に本格化し、現在に至っているが、日本人口に占める女性の比率が高いことが顕著である。本研究ではこの点に着目し、1950年代から2000年代に現地に移住した日本人女性を対象に、母語維持・継承に対してどのような意識や考えを持っているか、インタビュー調査から探究する。Borland(2006)は、メルボルンのマルタ系コミュニティの母語継承に係る要因を促進(facilitating)・動機付け(motivating)要因から明らかにしたが、本研究では、Borlandの枠組みを援用し、それらの要因に加え、母語維持・継承を阻む要因についても検証する。調査協力者の母語維持・継承に対する意識や価値観は、各個人が移住した日本とオーストラリア両国の歴史的背景および日本社会におけるジェンダーの役割に対する価値観の変化および「国際化」に伴う言語地位の意識等に影響を受けていると思われる。さらにこれらの分析結果から当該日系コミュニティの母語維持・継承についての問題についても触れたい。

第3会場 (E103教室)

電話会話の終了部に見られた謝罪による会話の再開について -親しい同級生同士の依頼-断り会話の場合-

甲斐 朋子 (言語文化専攻博士後期課程)

電話会話において会話をいかに円満に終わるかというのは容易なことではない。英語の電話会話の終了部については、Schegloff and Sacks(1973)等の会話分析研究によってその構造が明らかにされてきた。一方、日本語の電話会話研究は、日本語と英語、中国語等の終了部の構成要素の違いについて比較研究が行われてきたが、終了部の相互行為的構造については未だ十分な分析は行われていない。

本研究では日本語の電話会話において参加者が相互行為の中で、どのようにして会話を円満に終了しようとしているのかということを経験分析により構造的に明らかにする。本研究で用

いるデータは BTSJ コーパスの、電話のかけ手が友人である受け手に依頼を行うという電話会話 13 件である。

分析の結果、電話会話が円満に終了するかどうかについては依頼者と被依頼者間での談話アイデンティティの達成と保持が鍵であると分かった。7 件のデータで依頼を断る被依頼者と断られた依頼者が断りへの謝罪と謝罪の受容という行為により、それぞれ謝罪者、被謝罪者という談話アイデンティティを達成し保持したまま会話が終了していた。一方、終了部が延長された電話会話では被依頼者からの依頼の断りへの謝罪と依頼者の謝罪の受容が行われ、次に依頼者の謝罪があり被依頼者が受容する行為連鎖が行われ、会話終了が試みられた。しかし、被依頼者からの新たな謝罪により終了部の会話が再開され、依頼者が新たな謝罪を受容することで会話が終了していた。友人同士の電話会話では依頼を断るとい友人間の社会的連帯を傷つけかねない非選好行為を依頼を断った側が謝罪者となり、依頼を断られた側を被謝罪者とする事で和らげている。つまり電話会話を超えた人間関係に被依頼者が志向していると言える。電話会話の終了部でも、その一部分だけでなく、参加者間の人間関係といった大きな社会構造への参照の重要性が示唆された。

コーパス分析による英語心理学療法論文と一般学術文章における慣用語句使用傾向の比較

八野 幸子 (言語文化専攻博士後期課程)

本研究の目的は、英語心理学療法論文と一般学術文章に生起する慣用語句 (イディオム: associate with など) を比較し、使用傾向に差が認められるかを明らかにすることである。

心理学療法英語の研究では、宮本ほか(2012)において、特徴的共起語 (コロケーション: severely disable など) の抽出が行われたが、慣用語句については調査されていない。科学的文章における慣用語句の研究では、大木ほか (1996) で英文科学技術文におけるイディオムの使用傾向が、INSPEC テープの抄録文の調査により明らかにされている。しかし、この研究では汎用コーパスとの比較は行われていない。

本研究では汎用コーパス、とりわけアメリカ英語の集積である FROWN コーパスの学術的文章のサブコーパス J とアメリカの学術機関発行の論文を元データとする、発表者編纂の英語心理学療法論文コーパスから慣用表現を抽出し、それらの使用傾向を比較する。

本研究は今後、英語心理学療法論文読解独習者に教材選定等の参考にできる情報を提供することを目標としていることから、大木ほか (1996) とは異なった方法論をとり、市販の慣用表現集に掲載される約 1000 種類の慣用語句が、参照用辞書として実装された福井、小篠 (2008) 開発のリーダビリティ解析ソフト CheckRead を用いて行う。具体的手順は以下のとおりである。英語心理学療法論文コーパスと FROWN のサブコーパス J を CheckRead の idiom frequency の分析にかけ、頻度表を作成する。この頻度表から英語心理学療法論文コーパスと FROWN の J のサブコーパスのいずれにも出現しない慣用語句を削除。これにより新たに出来上がった頻度表の慣用語句を、近年、言語分析で用いられる、ランダムフォレスト法 (例えば、田畑 2012 ではこの方法で異なる著者の文学作品の判別とその判別に寄与した特徴的語彙の抽出が行われた) により分類し、両コーパスが判別可能か、また、判別に寄与する慣用語句は何かを調査する。この結果を基に、両コーパス間に慣用語句使用の差が認められるかを明らかにする。

第4会場 (E104教室)

中国語話者を対象とする日本漢字音教育のための一考察 -2 級新出漢語の読み方に関する調査の分析から-

汪 南雁（言語文化専攻博士後期課程）

近年、日本語漢字教育では、中国語話者の音読み問題、特に清濁・長短・促音の有無などの問題があると指摘されている。それらを中心に指導法の考案もなされてきたが、従来の研究では、対象漢字が常用漢字全体を中心としているものが多い。しかし、学習者は段階的に日本語を学習するため、対象漢字の範囲を絞る必要があると考える。また、これまでは学習者がどの程度確信を持って漢字を読んでいるかについてまで調査したものはない。そこで、本研究では、日本語能力試験 2 級新出漢語に注目し、中国の大学で日本語を学習する 3 級レベルの中国語話者を対象に、2 級新出漢語の読み方ならびに、漢字の読み方に関する学習者の確信度を調査した。その分析結果に基づき、効果的な日本漢字音の指導法の考案を目指す。

調査の結果、以下の点が明らかになった。①学習者の漢字の読み方に関する確信度と、実際の読み方の正誤との間に相関関係があり、自信を持って回答した場合の正答率はほぼ 60%以上であるのに対し、自信が全くない場合の正答率は 20%以下に止まっている。②先行研究で一般的に指摘されている問題点以外にも、長音と撥音、多音字による混乱、中国語音からの影響などの問題点が目立つ。

以上の問題点を解決するには、現代中国語音と日本漢字音の関係を正確に把握する必要があると考える。例えば、①中国語の「-ng」音→長音、②中国語の「-n」音→撥音、③「大」+漢字 1 字→タイ、漢字 1 字+「大」→ダイという先行研究で既に明らかにしている規則や、④中国語の「-ao」音→長音、④中国語の「-i」・「-u」・「-ü」音→短音になるものが多いという本研究で明らかにした規則などは、教育の現場にすぐに活用できるものであり、これらの規則を認識させることで、日本漢字音の学習がより効果的になると予想される。

本研究は、中国語話者を対象とする日本漢字音教育の基礎的研究の一部として行った。

日本語ビジネスメール作成の指導 -タイの大学の日本語専攻における実態調査から- ワラシー クンランパー（言語文化専攻博士後期課程）

日系企業に勤める日本語を母語としないビジネスパーソンにとって、ビジネスを円滑に進めるための日本語能力は大きな課題である。前野他(2013)によると、日系企業に勤務し、日本語を使用するタイ人(以下、TBP)は入社時に、日常的な日本語能力やビジネス会話のみならず、ビジネスメールを書く能力も求められている。メールのやり取りの成否は企業の評価や業績にも影響を与えるためである。従って、TBP のビジネスメールを書く能力を向上させるための第一歩として、タイの大学の日本語専攻で、ビジネスメール作成の指導がいかに扱われているかを知る必要がある。

本発表では、タイの 3 つの大学での日本語ビジネスライティングに関する授業の担当教員にインタビューを行なった結果を報告する。A 大学では、教師は現在手紙のビジネス文書が殆ど使用されていないと判断した上で、ビジネスメールに特化したビジネス文書の授業が開講され、挨拶などの儀礼的なやり取りよりも、メールの構成を認識させ、本文を明確かつ簡潔に書くことを重視した指導を行っている。一方、B 大学では手紙などを含むビジネス文書の一部としてメールが取り扱われている。その為、ビジネスメールの独特な挨拶は取り上げられたが、本文の書き方は特に取り上げられていない。又、C 大学では、ビジネスメールの重要性が高まっているという認識から、ビジネスメールを教える時間を増やし、現在ビジネス文書と同じ割合で扱われている。まず、敬語の使い方や社会的な要因への意識に注目し、更に独特な挨拶、適切な本文の書き方を中心とした指導を行っている。

以上から、タイの大学ではビジネスメールに焦点を当てる傾向が高まっているものの、具体

的なカリキュラムや指導法は大学により異なることが分かった。今後は TBP が書いたビジネスメールを具体的に分析し、それに基づいてビジネスメールの授業の効果的な指導を考察したい。

外国語学習者の学習動機と目標 —日本人韓国語学習者を対象に—

斐 貞銀(言語文化専攻博士後期課程)

日本の大学で開講されている外国語は英語を除いて、フランス語・ドイツ語・中国語・韓国語が代表的である。文部科学省の調査報告書によると、韓国語はここ十年間で最も開講数が伸びた外国語である。

そこで、本発表では日本社会において増加している韓国語学習者の学習動機や目的、学習過程における学習への楽しさや困難についてどのように感じているか、そして目標としているレベルなどの韓国語学習についての意識を、大学及び大学以外の学習施設で韓国語を学習している学習者を対象に調査した。調査項目として「韓国語学習動機や興味」、「学習における各能力への自信やその活動」、「学習者の目標と将来性」などについてそれぞれの項目に分けて作成した。

予備調査を行った結果、韓国語を始めたきっかけが「職業や将来いつか役に立つ」という将来性を意識している答えより、「韓国語や韓国文化が好きだから」という答えが半数以上であった。また、その結果は今回の調査でも同様で、韓国語を始めた動機は「韓国語に関心がある」、「韓流が好き」という答えが多かった。また、韓国語の能力を問う項目に関しては「読む能力」に自信があると答えた学習者が最も多く、「書く能力」、「話す能力」に自信がないと答えた。会話には自信も機会もないという答えが一番多かったが、学習者が一番身につけたい能力も会話能力だと答えた。このように、日本における韓国語学習者は韓国や韓国語、また韓国文化に興味を持っており、会話能力を身につけたいと思っていることがわかった。今回の調査結果から、韓国語教育者は韓国語のみならず韓国の文化を学習内容に取り入れ、韓国文化を中心に会話の機会を与えることの重要性が示唆された。

なお、本調査は、外国語環境で韓国語学習に成功した学習者の研究の一部として、日本人韓国語学習者の意識を調べたものである。